

母教会の体裁などかなぐり捨てて

山形伝道所の母教会となる 1958年

－ 仙台教会の歴史シリーズ その23 －

小林孝男

1. 日本バプテスト連盟結成と伝道

敗戦の2年後、1947年（昭和22）4月、日本基督教団から離脱した16教会によって、日本バプテスト連盟（以下連盟）が設立されます¹。バプテスト主義に立つ各個教会が、相互に協力して福音宣教の使命を果たすことが目的です。そのため連盟は年次総会を欠かすことなく開催し、使命の達成を目指して共通理解と合意形成を大切にしながら今日まで歩み続けています。「全日本に全き福音を」を標語に開催された第5回総会（1951）では、全国県庁所在地に開拓伝道を展開することが決議され、第6回総会（1952）では「四半世紀内に千の自立教会を」が提唱され、第7回総会（1953）は「全日本にキリストの光を」を標語に開催されます²。このように連盟の宣教のビジョンが年ごとに明確になる中で、具体的な伝道計画が実施されていきました。

1952年（昭和27）にW.C.グラント宣教師夫妻が来仙し開拓伝道を開始し、やがて仙台教会が誕生したのも、上記の流れの中での出来事です。

2. 連盟直属伝道所として山形開拓伝道スタート

さて、連盟伝道部では開拓伝道を支援するにあたり、初期においては伝道所を三種類に分けていました。直属伝道所、準直属伝道所、そして教会開拓伝道所です。このうち直属伝道所は、連盟の全国伝道方策に従い、連盟年次総会の議を経た開拓伝道で、連盟伝道部の支援の下に行われました。山形における開拓伝道は、この直属伝道所方式で1958年（昭和33）に開始されました³。

直属伝道所の場合、伝道者の派遣や伝道資金に関しては連盟伝道部が責任を持ちますが、名目上の母教会となる教会が必要となり、仙台教会がその役目を引き受けました。地域的なことを考えれば、それはごく自然な流れと言えるでしょう。但し、仙台教会も教会組織して3年目であり、また関谷定夫牧師から大沼上牧師に代わって1年目でしたので、教会内部を整えることに最大限のエネルギーを費やす必要がある時期でした。ですから宣教師や牧師が、バプテスマや主の晩餐や特別伝道集会等で、山形伝道所と時折関わりを持つ程度の協力しかできなかったのが現実であり、正に「名目上の母教会」でした。しかし、そのような仙台教会にやがて「決断の時」が与えられることとなります。

3. 実質的な母教会となる決断

ミッション・ボードからの補助金に大きく頼りながら運営されていた連盟でした

が、1960年後半ごろから「自立・自給化」の声が急速に高まります。ボードからの支援額の漸減という外的要因は軽視できませんが、内的にはベトナム反戦平和運動が激しく繰り広げられる中、連盟の米国依存体制が批判され、また戦前復帰の社会風潮に抗して、教会の在り方を厳しく、かつ真摯に問い返す動きが強まる状況が生まれます。その中で連盟は実力に見合った思い切った変革の下で、「自立と協力」の実を挙げる決断をすることになります⁴。

仙台教会の臨時総会当日（1972年5月28日）の週報・牧会通信欄⁵で、天野五郎牧師はこう語っています。

『連盟直属伝道所』というのは、年会で開拓伝道地が決議され、そこに連盟理事会が伝道者を招聘して派遣していました。そして名義上母教会を近隣の適当な教会におねがいし、伝道所いっさいの経費は連盟伝道部が引き受けていました。

それを名実共に母教会に伝道所を託そうということになったのです。

ただし昭和52年（1977）までの経過措置として旧規定（経済支援など）が生きて用いられます。が、山形伝道所の斎藤英哉先生のばあいは、5年の目標期間（？）が昭和49年（1974）1月で終わります。

名義上から実質的にも、となれば、当然いままでの母教会に、母教会になる用意があるかどうか問われねばなりません（昨年末、当時の伝道委員長であった川口正雄先生がこられたのはそのためでした。）」

臨時総会で様々な話し合いを行った末、仙台教会は山形伝道所の実質的な母教会になる決断をしました。そして母教会としては、「伝道所の自立精神を損なったりその課題を横取りしないよう“控え目に”かつ“積極的に”関わることを申し合わせ」⁶、斎藤師の仙台教会牧師（山形伝道所担当）就任、伝道所支援費の予算化、伝道所指定献金の設定等を実現していきます。但し、母教会からの山形伝道所への経済的支援は決して十分なものではありませんでした。そういった状況でしたが、山形伝道所は1974年（昭和49）1月から、大変厳しい自給の道に果敢に踏み出すのでした⁷。

4. 母教会の体裁などかなぐり捨てて

それから2年後の1976年（昭和51）3月に、斎藤牧師は健康上の理由で山形伝道所牧師を辞することになります。この事態を受けて母教会である仙台教会は、山形伝道所の皆さんと話し合いながら、牧師、宣教師、役員がローテーションを組んで主日礼拝と家庭集会の継続を目指し力を合わせました⁸。但し、これが母教会としては精一杯のところだったのです。山形の地に福音を広く宣べ伝える使命を担うべく、伝道所から教会へと成長していくための道筋を、伝道所の方々と共に様々な角度から整え、力強く支援していく使命が母教会としてはありましたが、それを十分に担うことができない状況でいた折に、全く予期していない方向から光が差し込ん

できました。

実は1977年（昭和52）4月17日の仙台教会の総会で、山形伝道所に関して大変重要なことが議決されました。翌週の週報・牧会通信欄に、総会での決定事項が以下のように報告されています。

「山形伝道所の教会形成への道の計画と推進のすべてを、人事面を含めときわ台教会におねがいます（もちろん山形伝道所の賛成が必要である、と同時に、そのことは仙台教会が山形伝道所に対して母教会であることをやめたことではなく、むしろその積極的な意思の表れであることが注意、強調されねばならない）」⁹

1977年当時の連盟理事長は松村秀一牧師（常盤台教会）であり、理事の一人が天野牧師でしたので、顔を合わせ言葉を交わす機会が当然増えます¹⁰。その様な中、2月に両者が山形伝道所の今後のビジョンについて内々で話し合った際に、上記のようなアイデアの提案が松村師からあったのです¹¹。

天野牧師は、仙台教会の4月の総会で山形伝道所について大きな決定をしたことに関して、「そのことは母教会であることをやめたことではなく、むしろその積極的な意思の表れである」とコメントしています。山形伝道所の教会形成への道の計画と推進を、他の教会に委ねる決定をしたことは、仙台教会が母教会としていかに力不足であったかを、内外に知らしめたという側面があります。本来母教会として担うべき働きを、自分たちが負いきれないため他教会にお任せすることが、母教会としての積極的な意思の表れである、などとどうして言えるのでしょうか。当時はすんなりとは理解できませんでしたが、次のような意味ではなかったのでしょうか。

母教会として一番大事にしなければならないことは、山形伝道所の教会形成への道が整えられ、計画が前進していくことに他なりません。その際、母教会としての体裁を保つ、などということは全く不要なことですし、主の前であっては意味のないことです。天野師が語る「積極的な意思」とは、「母教会として一番大事にしなければならないことを大事にする姿勢」を指していたのでしょうか。大切なことは計画が前進することであり、誰がそれを担当するかは、祈りつつ、状況に応じ、時々を選び取っていけばいいことです。そういった大局に立つ考え方に則って行動することこそが、母教会としての積極的な意思だったのです。

その後、松村師の推薦を受けた調弘道牧師が、1978年（昭和53）4月に山形伝道所に着任し、その3年後の1981年（昭和56）4月28日に、山形伝道所は教会組織諮問会議を開催し¹²、県内外からこの会議に出席した多くの方々の祝福の中で、「日本バプテスト連盟山形キリスト教会」が誕生する運びとなります。

-
- 1 『日本バプテスト連盟五十年史』 8～25 頁
 - 2 『日本バプテスト連盟七十年史』 79 頁
 - 3 資料(1981/04/28_山形伝道所教会組織諮問会議資料)
 - 4 同上 184～187 頁
 - 5 週報(1972/05/28)
 - 6 週報(1973/09/09)
 - 7 週報(1974/03/10)
 - 8 週報(1976/04/25)
 - 9 週報(1977/04/24)
 - 10 『日本バプテスト連盟五十年史』 530～533 頁
 - 11 週報(1977/02/27)
 - 12 資料(1981/04/28_山形伝道所教会組織諮問会議資料)